

聖人のつねのおおせには「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」  
(『歎異抄』 後序より 真宗聖典六四〇頁)

## 「わたし」に悩むひと（上）

第4組 栄光寺住職

佐々木 強

text by Tsuyoshi Sasaki

林暁宇氏の「明るい人はすばらしい 悩んでいる人は尊い」という法語がある。その言葉の意味を私が学んだ北海道教学研究所の所長、極楽寺住職の巖城孝憲先生を訪ねた。

悩んでいる人がどうして尊いのか。悩んでいるものは辛いだけではないか。そう聞くと巖城先生は即座に答えてくれた。「悩みというものには二種類あるのではないですか。一つは自分以外の他のことが問題となる悩み。もう一つは自分自身が問題となってゆく悩みです。この自分自身が問題となるところに尊いということがあるのではないのでしょうか。」

さて先生が教えてくださった「自分自身が問題となる」とは一体どういうことだろうか。

私たちは思い通り行かない問題が起きると、他のせいにしてゆく。あのようなことがなければこんな事にはならなかった。あの人さえ変わってくれたら物事は上手く行くのに。そのようなことは身の回りに、殆ど毎日と言ってよいほど起き、それこそ思い通りにしたい私の根性はその都度見えてくる。考えた末、先生からのお言葉を私は「そうか他のせいにしてゆくことが問題なのだ。他が変わればというのではなく、自分自身が変わらなければいけない。それこそが先生の言われた自分自身が問題となることなのだ。」そう解釈した。

御文のなかに「当流の安心のおもむきは、あながちに、わがこころのわろきをも、また、妄念妄執のこころのおこるをも、とどめよというにもあらず。(中略) かかるあさましき罪業にのみ、朝夕まどいぬるわれらごときのいたずらものを、たすけんとちかいます弥陀如来の本願にてましますぞとふかく信じて」

(御文一帖目三通・聖典762頁)とある。ここには悪い心をやめよ、妄念妄執の心をやめよとは書いてない。それどころか、かかるあさましき罪業にのみ…。やめようと思ってもやめることの難しい、そういう私たちを助けるとの誓いが弥陀の本願であると書かれているのだ。そして、そのことを深く信ぜよと。信ぜよ

というのは、そういう身であったと教えられることに他ならない。

「悪人とはわが身を持てあます者をいう。分かっているにもかかわらずしなければ生きられない。どこまでも我が身を優先してゆくものを悪人という」法誓寺住職黒萩昌氏の言葉だ。

親鸞聖人が聞いてゆかれた仏教は「明るい人」になって助かるのではない。「悩んでいるひと」つまり、このようにしか生きられない私に悩むものを救う。いつ何時も自分を優先してゆくものが私の正体であったと教えられてゆくことが真宗の救いであり、親鸞聖人ご自身の名前を述べて「一人がためなりけり」と言われたのだ。そこに親鸞聖人と阿弥陀仏との出遇いがあったと言える。

先生が教えてくれたこととは「他のせいにしてゆく私、起こる出来事のせいにしてゆく私。そのようなあなた自身を問題にしてゆきなさい。」と話されたのではないだろうか。そして教えにより明らかにされた自分自身を聞いてゆきなさいというのが、さきの林暁宇氏の言葉の意味であったのだ。自分自身を問題としてゆくこと。「わたし」に悩む人は尊いと。(次号に続く)